

# 日本語のオノマトピアに関する一考察

(小説『おばかさん』を題材に)

近 藤 富 英

## 1. はじめに

日本語は擬声語・擬態語が多い言語であるとよく言われるが、ここでは、実際の小説を基にその使用状況・形態・意味特徴を統計的に調査し考察することを目的とする。最初に擬声語と擬態語の区別に触れておくことにする。擬声語は、「雨がザーザー降る」、「犬がワンワン吠えている」などのように外界の物音や声をまねて作った語のことである。ここで注意したいことは、それが現実界の音声に近いかどうかではなく、その社会の言語体系に組み込まれ定まった形をしているかどうかである。いかにうまく迫真に迫った音でもその社会・文化の中で定着していないものは擬声語とはいえない。たとえばパンダは依然として希少動物のためかその鳴き声はまだ擬声語として定着するに至っていない。擬態語は現実界の音以外の物事の状態・動きなどを音声的にそれらしく表わす語である。擬声語は聴覚を通してしているが、擬態語はこれ以外の視覚・触覚・嗅覚などからの刺激を基にしている。なお、国語学者の金田一(1977)は、心理状態に関するものを擬情語としてとくに区別している。ブルームフィールドはそのLanguageの中で、聴覚に達する音をそのものをまねた形(imitative or onomatopoeic intense forms)と他の諸感覚や心理的情感を象徴的に音で表わした形(symbolic forms)とに分け、前者をオノマトピア、後者をシンボリックフォームと呼んでいる。本小論では、擬声語・擬態語を合わせてオノマトピアと呼ぶことにする。

分析のため使用したのは、遠藤周作の『おばかさん』である。選んだ理由はこれが大衆小説で次の抜粋に見られるように、かなりオノマトピアに富んだ作品だからである。

首にほうたいをまいた女が先に立って真暗な階段をガタゴト音をたててのぼった。

「先生ヨ……おじいさんてば」

中にいる人間を女たちが起こしているらしい。やがてうす暗い電灯がパッと二階の窓についた。

ナポレオンが足もとでクンクンなっている。

(『おばかさん』角川書店108ページ、下線は筆者)

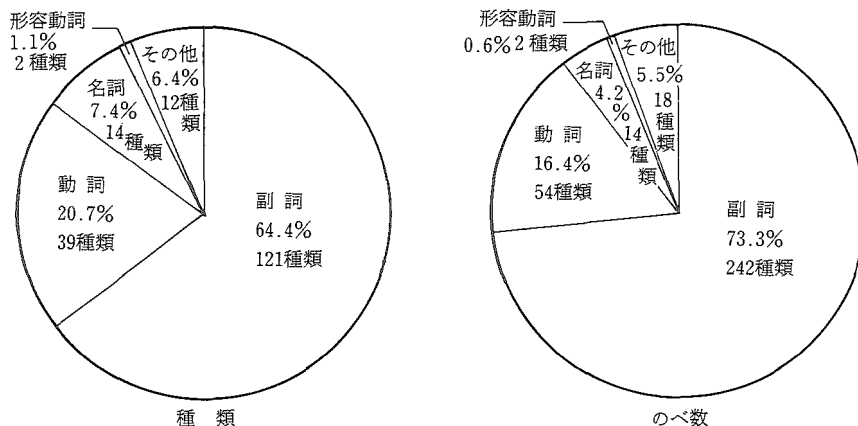
もちろん作家や言語レベルの違いによってオノマトピアの使用頻度が異なるだろうことは容易に想像される。たとえば、オノマトピアがその性質から言って、具体的に感覚に訴えたり、力強さを持った表現を可能にするため、そのような効果をねらった場や文章に多く用いられるであろう。

この遠藤周作の作品207頁の中で、実は188種類、延べ数にして330個のオノマトピアが使われている。上の抜粋にも見られるように非常に多くのオノマトピアが用いられていると言ってよい。以下、①オノマトピアの品詞性、②オノマトピアの形態上の特徴とその意味、③

オノマトピアの用いられる領域の偏り等について順に考察していくことにする。

## 2. オノマトピアの品詞性

まず、作品中に現われたオノマトピアがどのような品詞として使われているか調べてみた。結果は次の円グラフの通りである。予想していた通り、副詞として用いられているものが、全体の約64%、延べ数では約73%である。延べ数で見ると副詞だけで全体の約4分の3近くを占めることになる。日本語にオノマトピアが多いと言われる理由の一つは、このように副詞というある程度固定した使い方がされているからだといえることができる。さらに次の動詞と合わせると延べ数で全体の約90%を占めることになる。副詞が多いということは、副詞にいろいろなニュアンスを込めているということ、日本語のひとつの特徴と言えるだろう。また、動詞が比較的多いということは、最近の日本語からでもわかるように、何でも動詞にして使うことのできる日本語の造語力の強さにきていると思われる。



以下に作品中に現われたすべてのオノマトピアを品詞ごとに表にしている。( )の数字は延べ数である。

### ①副詞として使用されているもの

( )の中の数はのべ使用回数

ア行 (1種類)	㊦	ウヨウヨ		㊦	キュッと キラリと キョロキョロ(2) ギラギラ(3) キラキラ(5) キッチリ キョトキョト ぎっしり
カ行 (33種類)	㊦	ガーンと ガタガタと カァッと ガチャガチャと ガタゴト カチリ ガラリ ガラガラと ガミガミ		㊦	グルグル(2) ぐんぐん

		クシャクシャ クスクス クンクン クドクド(2)	ナ行 (7種類)	㊦	ニタツと(2) ニヤニヤ(4) ニヤリ(3) ニヤッ(4) ニコニコ
	㊧	ケラケラ			
	㊨	こっそり ゴホンゴホン(2) コツコツ コックリ ゴクゴク コロリ ゴツゴツ コツコツ ゴクリ		㊩	ヌツと(3)
			ハ行 (42種類)	㊪	ノコノコ(4)
サ行 (19種類)	㊫	サツ(3) さっぱり(7) さっと さっさと(2) ざっと		㊬	バタバタ(3) バタン(3) バタン ハッキリ(7) パタリ パクリ パッ パッタリ バラリ パクパク ハッ
	㊭	ジツと(17) しみじみ(2) ジロジロ(3) シインと(2) ションポリ(3) しんみり しっかり		㊮	ピクピク(3) ヒョイ(4) ヒョロヒョロ(2) ピタリ(4) ピシャリ ピタッ ヒョイヒョイ(2) ピイン ピクッ(2) ひそひそ(2) ピン ピクリ
	㊯	すっかり(2) スッポリ ズルズル ずっしり スタコラ		㊰	フフン プカプカ プン プイ ブラリブラリ プツリ プンプン フラリ
	㊱	せっせ(3)		㊲	ペチャクチャ(2)
	㊳	そっと(8)		㊴	ボイ(3) ボカン(3) ポッカリ ポロポロ ポツンポツン(2)
タ行 (11種類)	㊵	だらりと ダダダダッ			
	㊶	チチチと チラッと(9) チョッと(4)			
	㊷	つくづく ツカツカ ツンと			
	㊸	トボトボ トントン(4) どんより			

		ポツン ぼんやり(3) ホッと ポキポキ ポツポツ		㊟	モソモソ(2)
			ヤ行(3種類)	㊞	ゆっくり(5)
				㊟	ヨチヨチ ヨロヨロ(3)
マ行(4種類)	㊱	ミシリ ミシリミシリ	ラ行(0)		
	㊲	ムッと(2)	ワ行(1種類)	㊳	ワザワザ(3)

②動詞として使用されているもの

十と十する

- |             |            |
|-------------|------------|
| キョトンとした(3)  | ガランとした(2)  |
| キラリとさせて     | キンキンとした    |
| シーンとした      | ソツとして      |
| ニタリとした      | ニタツとした(2)  |
| ホッとして(2)    | ポカンとして(2)  |
| ハツとした       | フラフラとして    |
| ツンとした       | ヨロヨロとした    |
| ムツとして(4)    | ガチャガチャとさせた |
| ひっそりとして     | ホカホカとした    |
| ちょっとした騒ぎ(2) |            |

十する

- |        |            |
|--------|------------|
| ウズウズする | イライラして     |
| ドキドキする | ピクピクさせて    |
| ブンブンする | ウロウロして     |
| むっつりして | チャッカリした(2) |

十と十やる

- びしゃりとやられる

十る

- |       |      |
|-------|------|
| パクられる | ころげる |
| ひそめる  |      |

十つく

- |       |       |
|-------|-------|
| パクついて | バラついて |
|-------|-------|

十す

- |      |     |
|------|-----|
| ころがす | バラす |
|------|-----|

十めく

- きらめく(3)

合成動詞

- |         |        |
|---------|--------|
| ころがりこんで | ころげ落ちた |
|---------|--------|

③名詞として使用されているもの

- |       |         |
|-------|---------|
| キンキン声 | チャランポラン |
|-------|---------|

ヒソヒソ声	ドロン
ヤンパチ的	パア
ヘッピリ腰	のろさ
カタリ	

十の

カラッケツの	ペチャンコの
ボロボロの	シワクチャの
チンチクリンの	

## ④形容動詞的語幹をとるもの

のろさだから	ボロボロになる
--------	---------

## ⑤その他（笑い声、感嘆詞、呼びかけ etc.）

ハ、ハ、ハ、ハ	フフン
ヒャア—ツ	アッ
ふん	アッアッアッ
ホッホッホ	チョイとチョイと
サラサラサラ(2)	グワン
ピシッ(2)	バクリ(3)
カチリ(2)	

## 2.1. 副詞について

前に述べたように副詞として121種類（全体の約64%）、延べ数242回（約73%）使用されている。これらを始まる音により50音順に並べたものが、次の表である。

種類別（ ）の数字は濁音の内数

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	total	%
a	0	9(7)	4(1)	2(2)	0	11(2)	0	0	0	1	27	22.3
i	0	8(2)	8(2)	3	5	12	2	0	0	0	38	31.4
u	1	6(3)	5(2)	3	1	8(1)	1	1	0	0	26	21.5
e	0	1(0)	1	0	0	1	0	0	0	0	3	2.5
o	1	9(4)	1	3(1)	1	10(1)	1	2	0	0	27	22.3
total	2	33	19	11	7	42	4	3	0	1	121	
%	1.6	27.3	15.7	9.1	5.8	34.7	3.3	2.5	0	0.8		100

のべ数

	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ	total	%
a	1	9	13	2	0	21	0	0	0	3	49	20.2
i	0	16	29	14	15	24	2	0	0	0	100	41.3
u	0	8	5	3	3	10	2	5	0	0	36	14.9
e	0	1	3	0	0	2	0	0	0	0	6	2.5
o	0	11	8	6	4	16	2	4	0	0	51	21.1
total	1	45	58	25	22	73	6	9	0	3	242	
%	0.4	18.6	24.0	10.3	9.1	30.2	2.5	3.7	0	1.2		100

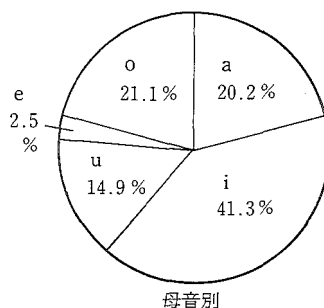
最もよく使われているのは種類別、延べ数とも「は行」でどちらも30%以上を占めている。次に続くのが種類別では「か行」(27.3%)、延べ数では「さ行」(24.0%)である。金田一(1977)によると「濁音とら行音とは単語の初めには来なかったというのが、本居宣長以来の定説である」(p.85)と述べられているように「ら行」で始まるものは皆無であった。また、表からわかるように「あ行」、「ま行」、「や行」、「わ行」もごくわずかであり、大きな偏りがあることがわかる。

なお、濁音で始まるものは28種類が使われている。これは全体の23.1%にものぼり、かなり多いと言えるだろう。使用別としては次表のように「が行」で始まるものが16個で、濁音全体の57.1%を占めている。これは「宣長以来の定説」に反する(?)ことでオノマトピアの幅広い造語力と柔軟性を示すと共に音を模するというオノマトピアの特質をはからずも示している。

また、延べ数を基にした母音別では、次の円グラフが示すように、「i音」が100回で、これは全体の41.3%である。さらに、「e音」のものが6回(2.5%)と極端に少なく、母音の上で大きな偏りが見られる。

	が	ざ	だ	ば	total
a	7	1	2	2	
i	2	2	0	0	
u	3	2	0	1	
e	0	0	0	0	
o	4	0	1	1	
	16	5	3	4	28

濁音で始まる種類の数



母音別

## 2.2. 動詞化について

動詞として使われているものは39種類(20.7%)、延べ数では54種類(16.4%)にのぼる。この中では「オノマトピア+と+する」という形が目立つ。これが使用頻度が増すに連れて「オノマトピア+する」となり一般動詞化の過程をたどる。さらに他の動詞の語尾である「めく」、「る」、「つく」、「となる」などと組み合わせられて動詞として使われることもある。また、「ちょっとした打撲傷」、「チャッカリした身がまえ」のように叙述用法ではなく、もっぱら形容する形で用いられるものもある。

## 2.3. 名詞化について

これには「へっぴり腰」、「ヒソヒソ声」などのように、オノマトピアだけでなく合成語として名詞になっているものも含めた。名詞としては14種類(7.4%)しか使われていなかったが、これらはいろいろな広告に使用されているものである。洗剤の「ザブ」、薬の「イボコロリ」、化学雑巾の「サッサ」などはその例である。これらはいづれも聴覚的な力強さやその効力を暗示し、さらには外国語のようにも響き、しゃれた効果も上げうように配慮されている。

## 2.4. 形容動詞化

「+に」、「+な」あるいは「+だ」の形をとり、形容動詞の語幹と見られるものは「のろ

さだから」と「ボロボロになる」の二つ見受けられた。なお、「ノロい」、「ゴツイ」などのような形容詞化した例は見られなかった。

### 2.5. その他について

笑い声、感嘆詞、呼掛けなど12種類（6.4%）が用いられていた。擬声語がほとんどであるが、たとえば「アッアッアッ」など変異が見られるが、3回の繰り返して程度の多さを象徴させる使い方が目立った。

また、オノマトピアではないが、間違えやすいものとして、「度々（たびたび）」、「興味津々（きょうみしんしん）」、「愕然（がくぜん）」などがあった。これらが、かなで表記されると、うっかり間違えてしまいそうである。

## 3. オノマトピアの形態上の特徴

次にオノマトピアの形態について見てみよう。ここでは副詞と動詞について一音から成るものから順にその形態の特徴を見てみた。使われていた割合は次の表のとおりである。4音のものが一番多く、種類では56種類（44.4%）、延べ数では94個（38.7%）使われていた。これは「ガタガタ」、「ガタゴタ」など同音語の反復や一部交替が日本語に多いことによると思われる。また、一音の延べ数が多いのは、「ジッ」が17回も使われていたからである。

	種類	%	のべ数	%
1音	12	9.5	45	18.5
2〃	17	13.4	34	14.0
3〃	37	29.4	64	26.3
4〃	56	44.4	94	38.7
5〃以上	4	3.2	6	2.5
total	126	100	243	100

#### ①一音及びその変化（ ）は延べ数

カアッ	キュッ	サッ(3)
ソッ	ざっ	ジッ(17)
ヌッ(2)	チョッ(6)	パッ(3)
ハッ(2)	ホッ(2)	ムッ(6)

ここには、一音+促音（ッ）だけであった。種類としては、一音の長音化（アー、ウー等）、一音化+促音（カーッ、ザーッ等）もあるが、この作品には「カアッ」（アを長音化と見なせば）のみで、残りは、促音のみが続くものだけであった。

#### ②二音から成るもの

1音+ン	プン	ピン	ツン(2)
1音の長音+ン	ガーン	シーン	
単純な2音の連なり	ブイ	ポイ	ヒョイ(2)
1音+促音+同じ1音	さっさ(2)	せっせ	
単純な2音の連なり+促音	ニタッ	ピタッ	ヌウッ

チラッ(9) ピクッ ニャッ(4)

二音から成るものは次のように分けられた。単純な「二音+促音(ッ)」が17個で二音から成るもののうち種類別では約38% (延べ数では約57%) を占め最も多く用いられていた。

③三音から成るもの

〇〇+リ	カチリ	ガラリ	チラリ(2)
	コロリ	ゴクリ	だらり
	ニタリ	ニヤリ(3)	パタリ
	バクリ	バラリ	ピタリ
	ピタリ	ピシャリ	フラリ
	ブツリ	ミシリ	
〇〇ッ+リ	キッチリ	ギッシリ	こっそり
	こっくり(2)	さっぱり(7)	しっかり
	すっきり	すっほり	ずっしり
	はっきり	バッター	ポッカー
	ゆっくり	ひっそり	チャッカー
	むつつり		
〇〇+ン	パタン	バタン	ポカン
	ポツン		

これは、上の3つのパターンにまとめられた。「リ」と「ン」を語尾に持つものばかりであった。

④四音から成るもの

ウズウズ	ウロウロ	ガタガタ
ガチャガチャ(2)	ガミガミ	ギラギラ
キョトキョト	グルグル(2)	ガタゴト
ガラガラ	キョロキョロ(5)	キラキラ(5)
ぐんぐん	クンクン	クドクド(2)
ケラケラ(2)	コソコソ	ゴクゴク
ゴツゴツ	コツコツ	しみじみ(2)
ジロジロ(2)	ションボリ(3)	しんみり
ズルズル	つくづく	ツカツカ
トボトボ	トントン(4)	どんより
ニヤニヤ(4)	ニコニコ(2)	ノコノコ(4)
パタパタ(3)	パクパク	ピクピク(4)
ひそひそ(2)	ヒョイヒョイ(2)	ヒョロヒョロ
ブンブン(2)	ブカブカ(2)	ベチャクチャ
ポロポロ	ぼんやり	ポツポツ
ポキポキ	モソモソ(2)	ヨチヨチ
ヨロヨロ(4)	ワザワザ(3)	キンキン
フラフラ	ホカホカ	イライラ
ドキドキ		

四音から成るものは、56種類(44.4%)使われていた。「ガラガラ」のような同音の繰り返し大部分である。これをさらに同音語の繰り返しの語尾のおとによって分けると次のよ



うになる。

同音の反復語の語尾の音		数字はその回数		
ア	イ 1	ウ	エ	オ
<input checked="" type="checkbox"/> カ 3	キ 2	<input checked="" type="checkbox"/> ク 3	ケ	コ 2
サ	シ	ス	セ	ソ 1
タ 2	チ 1	<input checked="" type="checkbox"/> ツ 3	テ	ト 1
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ	ヒ 1	フ	ヘ	ホ
マ	ミ 1	ム	メ	モ
ヤ 1		ユ		ヨ
<input checked="" type="checkbox"/> ラ 6	リ 2	ル 2	レ	<input checked="" type="checkbox"/> ロ 6
ワ				ヲ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ
ザ 1	ジ	ズ 1	ゼ	ゾ
ダ	ヂ	ヅ	デ	ド 1
バ	ビ	ブ	ベ	ボ 1
パ	ピ	プ	ペ	ポ
シャ		シュ		ショ
チャ 2		チュ		チョ
ニャ		ニュ		ニョ
ジャ		ジュ		ジョ
<input checked="" type="checkbox"/> 7				

(3回以上使われたものはで囲ってある)

「カ行」(10個)、「タ行」(7個)、「ラ行」(16個)、「ン」(7個)が多いことが分かる。中でも「ラ行」で終わるものが最も多く、こらは「ラ行」で始まるものがなかったのと考え合わせると興味深い。

また、「タ行」は「ガタガタ」、「パタパタ」、「ポツポツ」、「コツコツ」などのように強い音感をあらわしているようである。ところが、「カ行」は同じ「カ」が語尾音になっても「ツカツカ」のように勢いのあるものもあるが、「ホカホカ」、「ブカブカ」のように柔らかい音感を持つものもあり、「カ」という一音だけの感じ方はいちがいに決められないようである。ところで、同音の反復語以外に「ガタゴト」などのような音の一部交替があるが、これはとくに「ア」と「オ」の交替が多い。

#### ⑤五音以上

ゴホンゴホン(2) ブラリブラリ

ポツンポツン(2) ミシリミシリ

すべて同音の反復語であった。たとえば、「ドンブラッコ」や「ガチャリンコン」など可能であるが、それは既成のものを組み合わせて特別な効果や余韻を持たせたりするものようである。

### 4. オノマトピアの分野の偏り

次に、味覚・嗅覚・触覚・視覚・気分(心理状態)・聴覚の各分野に分け、その使用状況について調べてみた。結果は次の通りである。

味覚	なし				
嗅覚	ムッ	ブン	ブンブン		
触覚	キュツ	ホカホカ	ずっしり	しっかりと（握りしめる）	
視覚	ヨチヨチ	トボトボ	コソコソ	ノコノコ	グルグル
	ゆっくり	ジッ	ピクピク	フブン	ニャッ
	ポカン	ジロジロ	はっきり	キョロキョロ	ニヤニヤ
	ニタッ	ニタリ	ニヤリ	ダラリ	きらめく
	チラッ	うようよ	ニコニコ	ツン	ソッ
	サッ	ソロソロ	ギッシリ	キョトン	ポイ
	せっせ	ぐるぐる	のろさ	ぼんやり	チャランポラン
	キラリ	さっさっさっ	ガラソ	プカプカ	モソモソ
	ノロノロ	スッポリ	ツカツカ	ヌッ	ひょい
	ポッポ	ブンブン	チンチクリン	ひょいひょい	くしゃくしゃ
	ブラリブラリ	ヒョロヒョロ	フラフラ	バクリ	ポイ
	ばくつく	ブイ	ガタガタ	スタコラ	ピタリ
	ポツンポツン	ピタリ	ポロポロ	コックリ	パッ
	ドロン	ヌウッ	ツン	ペチャンコ	バクする
	ポロポロ	コロリ	ふるわせる	さっぱり	ギラギラ
	ぼんやり	ヨロヨロ	ころげ落ちる	バツタリ	ゴツゴツ
	ブラリ	キョトン	ビクッ	バラリ	ウロウロ
	すっかり	カアッ	ガラリ	シワクチャ	ピン
	どんより	ばらつく	バラす	パア	ハッ
	ざっと	キラキラ	へっぴり腰	バクバク	チンチクリン
キョトキョト					
気分 心理状態	ゆっくり	こっそり	チャッカリ	しみじみ	さっぱり
	ムッ	ドキドキ	しょんぼり	うずうず	ソッ
	ワザワザ	カアッ	しんみり	むっつり	つくづく
	ぼんやり	イライラ	ビジャリ	ホッ	ハッ
	キッチリ				
聴覚	キンキン	トントン	ケラケラ	バタバタバタ	カタリ
	チチチ	ダダダ	ガーン	バタバタ	ガチャガチャ
	バタバタ	ころがす	パタン	シーン	アッハッハ
	クスクス	ゴホンゴホン	ひそひそ	ヒャアッ	ポツン
	ミシリ	ヒソヒソ声	ひっそり	サラサラサラ	ペチャクチャ
	ガタゴト	クンクン	ゴクゴク	パタン	カチリ
	コソコソ	ピシッ	ホッホッホ	クドクド	ボキボキ
	ゴクリ	ガラガラ	ブツリ	ひそめる	グワン
	ガミガミ				

以上を種類別に表にすると次のようになる。

	種類	%
味覚	0	0
嗅覚	3	1.8

触覚	4	2.4
視覚	101	59.4
気分・心理	21	12.4
聴覚	41	24.1
total	170	100

つまり、視覚に関係したものが、101種類（59.4%）使用されている。これは、文字通り目で見たものを音的に表わす擬態語だが、これが最も多い。とくに人の様子を表わすものが多く、歩き方にしても「ヨチヨチ」、「トボトボ」、「コソコソ」、「ノコノコ」、「グルグル」、「ゆっくり」、「ヒョロヒョロ」、「ブラリブラリ」などたくさん使われている。

また、味覚に関するものがなく、嗅覚に関するものもわずか3種類（1.8%）であった。作家の特質や作品の性格にもよるであろうが、日本人はたとえば料理にしても見た目を大事にするので、味覚・嗅覚にはあまり関心を払っていないということもできるであろう。人間全体の情報量の内、視覚によるものが全体の80%を占めるということはよく言われるが、ここでも視覚が6割近くを占め、人間と情報量という点において関連がうかがわれる。

## 5. ま と め

今までも、オノマトピアの研究は種々行なわれているが、ある作品を通して統計的に考察したものはないと思われる。その意味でさまざまな日本語のオノマトピアの特質が明らかになった。

日本語はオノマトピアが多い言語と言われるが、それは本拙論にもあったように日本語のオノマトピアは副詞の形を取ることが多くそれだけ目立ちやすいということにも一因があるようである。なお、今回取り上げた作品には英訳があるので、今後それらを比較対照する研究も考えられる。

### 分析に使用した文献

遠藤周作『おばかさん』角川書店、1975年。

### 参考文献

浅野鶴子編『擬態語・擬声語辞典』角川書店、1978年。

Bloomfield, L, "Language" George Jallen & Unwin 1933年。

金田一春彦『日本語』岩波新書、1977年。

大野晋『日本語をさかのぼる』岩波新書、1976年。